



穏やかな大阪湾を11艇がスタートした

2013神戸・横濱ヨットレース 外洋レースの登竜門として

■レポート／新田肇・レース広報委員長 ■写真／神戸横濱ヨットレース実行委員会事務局
http://www.kyryr.jp/

まずは参加艇ありき

昨年5月に行われた第3回沖縄レースは多くの参加艇を得たが、不幸な事故が発生してしまった。しかしこのレースに参加した艇の多くが外洋のヨットレースに対して熱い思いを抱いていることがわかった。

昨今インショアレースが盛んだが、島周りレースも参加艇が徐々にではあるが増加傾向にある。インショアのブイ周りレースでは味わえないフィニッシュ後の「達成感」が、長距離外洋レースで味わえるからではないだろうか。

昨年の沖縄・東海レース終了後、参加艇の有志が集まり、外洋ヨットレースに対する思いを語り合ったところ、「外洋レースを絶やさないようにしましょう」「外洋レースを続けよう」という声が上がった。

神戸・横濱レースはそのような中で生まれた。

しかし、当初、神戸・横濱レースは参加艇が決まっていなかった。つまり、主催者が決まっていなかったのだ。通常のレースでは主催者がレースを企画し、参加艇を募集するのが一般的である。しかし神戸・横濱レースはまず参加艇ありきで、参加艇が「こんなレースをしたい」ということからすべてが始まった。

主催者に恵まれたレース

「大阪湾をスタートし東京湾でフィニッシュするレース」が何故今までなかったのか？ という問いかけに対し、スタートは神戸の沖合、フィニッシュは横浜という海域を決めた。友が島水道、遠州灘、浦賀水道と本船が行き交う中のレースであることから心配する声もたくさんいただいたが、当然のことである。これまで浦賀水道の近くでレースをすることは考えられなかった。

そこで、神戸・横濱レースに参加を表明した艇は、友が島水道を抜けるのに最適な航路、浦賀水道脇を安全に航行する航路をそれぞれが必死で勉強した。ブイ周りのレース以上に勉強した。今回、安全に本レースを終了できたが、この姿勢が安全にもつながっていたと感じている。

参加艇間の意思の疎通も通常のレース以上に図られた。神戸のハーバーに集結した参加艇は、どの艇も外洋レースに向かうヨットとして意志の強さが見え、輝いていた。

またこのレースは主催者にも恵まれた。参加者の「こんなレースをしたい」との思いを受け止め、神奈川県セーリング連盟が主催者となることを二つ返事で引き受けてくれた。今回のレースが実現した最大の要因で

ある。神奈川県セーリング連盟の貝道さんをはじめ、主催者が関係省庁への挨拶、下準備を周到に進めていただけたことは本当に素晴らしいことであった。

一方、「東京湾にレースをしているセーリングが入ってくる」という一見無謀にも思われる状況に対し、海上保安部からは「ヨットが1艇ずつ入ってくると考える」という見解をいただいた。これも神奈川県セーリング連盟の関係各所に対するレースに対する地道な説明の結果であった。

フィニッシュして横浜ベイサイドマリーナの桟橋に舳をといった時の達成感はこのレースを走りきった仲間間でしか味わえない格別なものだった。さらに横浜ベイサイドマリーナのホスピタリティーはまるで海外のレースに参加していると錯覚をするほど素晴らしいものであった。

外洋レースを絶やすな

このレースは2年に一度、開催する予定である。次回には2015年の予定で、その準備はすでに始まっている。

2014年には沖縄レースが予定されている。ということは、日本の海で沖縄・東海レース、神戸・横濱レースが隔年で行われることになる。神戸・横濱レースはこれから外洋レースに挑戦しようとするヨットやセーラーの登竜門として位置づけられればよいと考えている。

「外洋レースを絶やすな」の言葉を信じ、このレースに協力をしていただいたすべての関係者の方々にこの場を借りてあらためてお礼を申し上げたい。また今回のレースが成功したと評価を受けていることを真摯に受け止め、次回の神戸・横濱レースに向け精進したいと考えている。



優勝したTREKKEEチーム。前列で優勝カップを持つのが新田肇オーナー

